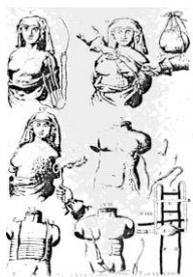


甲状腺外科草子 6

西洋外科学事始

杉野 圭三

近世の外科学はアンブロワーズ・パレからヨハン・シュルテス (Johan Schultes, 1595-1645)、ローレンツ・ハイスター (Lorenz Heister, 1683-1758)へと引き継がれ、日本にはオランダ貿易を介して伝えられた。



Schultes 乳房切断術



ハイステルの手術書

檜林鎮山 (1648-1711) は、長崎においてこれらの医学書や見聞した知識を編纂し、紅夷外科宗伝 (こういげかそうでん) として編纂したが、内容からシュルテスの手術書からの引用が主と思われる。



檜林鎮山



紅夷外科宗伝



大槻玄沢



紅夷外科宗伝 (1706)

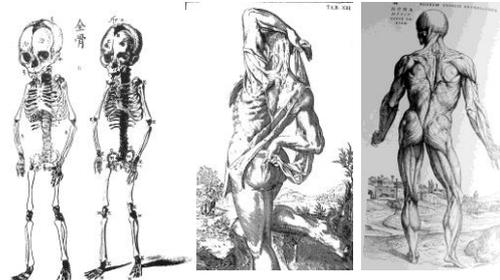


Schultes 外科手術書 (1693)

大槻玄沢(1757-1827)は、シュルテスよりもさらに進歩したハイスター外科書を翻訳し、「瘍医新書 (1790)」として著し、日本の若き外科医に大きな影響を与え、華岡青

洲らの活躍に繋がることとなった。

大槻玄沢は師である杉田玄白から、更に解体新書 (1774) の改訂作業 (誤訳が多かったため) を依頼され、「重訂解体新書 (1826 出版、翻訳は 1798 に完成)」を作成した。



解体新書 (左) との比較³⁾

Fabrica(広大図書館蔵)

先日、古い医学史ファイルを調べていたら文献3を発見した。約20年前、広島大学医学部各講座に配布された学生レポートである。学生とは思えない素晴らしい内容なのでコピーしたものと思われる (記憶曖昧です)。その要旨は『西洋のオリジナルの解剖スケッチに比較し、模写した日本の解剖図は陰影がなく輪郭線の線描のみで三次元的な立体感がない。ヴェザリウスの解剖書

(Fabrica) などには背景の風景も描かれているが、翻訳本では省略されている。陰影がないことから、いろいろな角度から光を当てても変わらない形が存在し、プラトンのイデア的世界の表現である (スミマセン、私には難しすぎです!)』というものです。まさか、その著者が今は当院の Dr. とは!!

参考文献

1. 小川鼎三。医学の歴史。中公新書
2. アンブロアズ・パレ没後400年祭記念会実行委員会編：日本近代外科の源流。
3. 静川寛子。人体解剖図にみる美術と人体の歩み寄り。広島大学医学部教養ゼミレポート、22-31, 2001。
4. 西村書店。解体新書 (復刻版)、2016
5. 杉田玄白、前野良沢、酒井シヅ訳。解体新書、講談社学術文庫、1998。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想) 2021年11月8日